

---

# プリザードとスノーガール。

雲霧 柚留

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブリザードとスノーガール。

### 【Zコード】

Z5491L

### 【作者名】

雲霧 柚留

### 【あらすじ】

天然ボーキラードボーカッシュな「雪女」（ゆきめ）はある日、一人の男の子に恋をするが・・・

## 設定

はい、初イナイト夢小説。うん、吹雪好きです。

### 設定

名前・火月

雪女

性格・ツンデレ、クール、天然ボーイキラー、無口

髪の毛・ホワイト（脱色とかじゃないよ）

容姿は・・・こんな感じかな？

追加とか捏造とかありまくりです、きっと。

天然ボーイキラーなヒロインは、サッカーになると熱くなります。

クールがヒートになります（意味不明）

連載増やし過ぎだつて？いいじゃまいか14本くらいあるけど気にしないほうが。

## 雪女＝女だけ男の子に近いキャラクター（前書き）

雪女は、「搖理籠学園」から転校する設定。

え？ ネーミングセンスが無い？ はいそつですが何か  
サツカ一郎に女の子は雪女だけです。

搖理籠学園サツカ一郎のみ名前表示

雪女ちゃんは男っぽい女の子で、口調も大体男です

## 雪女＝女だけ男の子に近いキャラクター

理籠学園サッカー部

シ「おい、雪女」

雪「雪女って呼ぶな、部のときは『雪』と呼べ、シオン。シ「どうでもいいだろ。ドリンク、3本余ってるか? アルコヒル口がやられた」

雪「はあ? 熱中症か?」

シ「まあ、そういうのだから」

ア「雪女ああ～ん・・・・」

マ「早くうううう～・・・・」

雪「ほり、俺特製だ」

パシツ

ア「雪さん、せんきゅーです」

雪「ドリンクの管理くらいお前がしろ、シオン。次期キャラクターだろ?」

シ「そうだったな・・・・」

俺は今度転校する。

えーと・・・・どこだつたかな・・・たしか・・・らしい・・・なんだ  
つけ  
まあいいか。

雪「ちやんと今日の宿題やつたか?」「  
マ「ゴクゴク・・・・アルコ、お前やつたか?」

ア「うくうく・・・マルコにそせりやつたのか？」

シ「やべえ、俺はやつてねーぞ」

雪「俺もだ。おいクロウ、[UN]せみ跡」

ク「何で俺が処理する前提？」

マ「処理とかひでーしー！」

雪・ク「だつて処理する／のはお前／じゃないですかー」

ア「うわ、息ぴつたりじょん（泣）」

キキッ

シ「え？ 今の音なんだ？」

ア「車っぽい音でしたねー。」

雪「そうだな、見に行くか？」

何かが変わる。俺は何故かそう思った。

私たちはあの後グラウンドに出て、あの音の原因を見に行つた。

ア「あーーーあれって今噂の雷門中の紋章じょんーーー！」

雪「何處にあるんだ？」

マ「ほらそこだつて！」

そこにはイナズマイレブンの車があった。

ガラツ

「ひやーーー！此処が搖理籠学園か！」

中からはオレンジ色の・・・？

頭に何かを巻いている男の人が出でてきた。

ア「雪さん、誰かをスカウトしに来たんでしょうーか？」

雪「俺たちを？まさか～」

俺たちのサッカーチーム「スノウボーアガールズ」はそこそこ強い。  
だからってありえねえよな・・・

そうしたら女の人が出て来て俺の方へ歩いてきた。

「初めまして火月さん。ちょっとお話良いかしら？」  
「は、はあ？」

え？　え？　え？  
俺、ですか？

なんかアル「とマル「がめぢゃめぢゃ嬉しそうな顔で見てるし！  
ちょ、手振るなよーシオン止めろよー

「初めまして……俺はイナズマイレブンのゴールキーパーの田堂守だ。よろしく……」

そう言つて俺に握手をしてきた。

雪「俺、火月 雪女だ。一恋女……だけど練習中は「雪」って呼んでもらってる」

あはは

俺、コミュニケーション苦手なんだよ。  
しかもこの人絶対熱血系だろうな……

「そして私はイナズマイレブンの監督吉良瞳子よ、よろしく。今回處に来たのはあなたをメンバーに入れたいと思つたからよ。是非私たちと一緒に来てくれないかしら?」

やつぱりスカウトか。

でも・・・

「すまねえが遠慮しておくれ・・・。

「何故?」

「俺は今度転校する。だからキャプテンを引き継がせなきゃならねんだ。だからお引き取り願い「駄目ですよコキメちゃん。」アル

コ…シオン!」「

俺は瞳子監督と田堂君と話たはずなのに・・・

ア「俺たちはこの人達の実力を見ていないですよ。」

シ「そうだぜーおまえはレオの事気にしてるかもしんねーけど、みんなは絶対そんな事望んでねーと思つぜ。一回戦つてみて考えたらどうだ?」

雪「一人がそこまで言うのなら・・・ではお手合せをしてから考える。ついてきて下さい。

アル「シオン、みんな連れてきてくれ。」

シ「おうー俺は一年呼んでくる。」

ア・マ「では俺たちは残りの人を呼んできます。雪ちゃん、先行つててください。」

雪「(やつぱり双子だな・・・)分かった。」

そして運命のサッカーがキックオフした。

(、女の雪王、がどれだけの実力か見せてもらひわ。)

続く

女一人でもパワーは十分

雪「相手は日本1だから手加減はいらねえぞ。全力を出して勝利してみろ！」

ア・マ「双子パワーで負けません」

「「「了解！」」

۱۰

((キツクオフ))

雪「行くぜ！アルコ！マルコ！」  
ア「はい！」

そう言ってアル「」とマル「」は「」ゴールまで突っ走って行つた。

雪「あの一人の早さはピカイチ。誰か付いてこれるかな?」

俺は挑発するように言った。

雪「アル」「マル」。一気に決める。」  
ア「じゃお言葉に甘えて。」

ツインズ・オブ・アイシクル！――！

「たあああああつ――！」

ゴットハンド！――！

シユウウウウ

「ふー、つえーな――！」

雪「あんなに近いツインズ・オブ・アイシクルが破られるなんて・  
・・・」

やべえ・・・・

雪「ワクワクが止まらねえ・・・つ――！」

雪「次、俺が行くよ。」

俺はシオンに報告した。

シ「おつ、久しぶりに雪が出陣か？」

雪「ああ。久しぶりに・・・燃えて来やがった！」

シ「そうか。あんまり熱くなり過ぎないでくれよ。」

ボールが来た。

雪「分かつてゐるぜ。んじゃあ行つてくるぜ。」

一気にスピードを上げた。

雪「はあああああああつーー！」

ディング

スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード……！

マジン ザ ハンド

「たあつーー！」

バキッ

「おわつーー？」

（（（（――――ル――））））

雪「よつしゃあーーー！」

久しづりのホール。

嬉しくって、樂しくて！――！

雪「久しづりじホールだぜー！」

「はい、そこまで。どう?試合をしてみて?」

雪「やっぱ強いチームと戦うのはたの・・・いやいや。」

シ「もう見栄を張らなくともいいんじゃねーの? 行ってこよ雪。

ク「そうですよ、いろんな生き生きとした雪さんは久しづりでした。

マ・ア「カッ」よかつたです、雪さんー！」

「うううん、とみんなも首を縦に振つてゐる。

雪「シオン、アル」「マル」…みんな…よし。瞳子監督、  
よろしくお願ひします。」

「じゃあ龍崎雪女、貴女をイナズマキャラバンの一員として正式に  
認めます。」

雪「ありがとうございます。今後よろしくお願ひするが…。」

今日は久しぶりに筋肉痛になつた。

続く

## 女一人でもパワーは十分（後書き）

「ツインズ・オブ・アイシクル」  
「スノーウーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード」  
・・・自分で書いといてなんですが・・・カッコいいぜ！  
そして長いぜ！

女で悪かつたな・・・（前書き）

雪女ちゃんは、他に技を持つてます。

前話参照の

「スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード」や  
「アイシクル・フォール」  
「スノーフォール・オブ・ブリザード」  
「ドラゴン・アイシクルブリザード」  
「アイシクル・オブ・フォール」など。

女で悪かつたな・・・

チュン チュン

「・・・そうだ、俺はイナズマキャラバンに居るんだった・・・」

俺は今イナズママイレブンの一員として一緒にエイリア学園を倒すことにになった。

私が起きた時には、半分くらいの人が起きていた。

「おっ！ 起きたか火月。今日はおまえを含めて一緒に特訓をするんだ！」

女だからって容赦はしないぞ。よろしく頼むぜ。

「分かったキャプテン。あと私は搖理籠で練習中は「雪」「雪」と呼ばれてたから、

そう呼んでほしいんだけどよー」

「分かった！なら俺もキャプテンじゃなくて田堂が守つて呼んでくれ。」

「了解。じゃあ守つて呼ぶ。」

「ああ！ 分かった。じゃあ後でなー！」

そつと守は何処かへ行ってしまった。

(あの熱血キャプテンなら信頼できる。) (頑張ろつ。)

そのあとご飯を食べて、

特訓がはじまりました。

練習試合では、アイシクル・オブ・フォールが立向居君にクリーンヒットしてあせつたぜ

まさか顔面に当たるなんて・・・みんな目が点だったぜ

俺は悪くないんだよ、きつと……ボールが悪いんだ。

くそっ、入つてそうそう変なイメージがついたじゃねーか…立向居君、ほんとにごめんな。

後、お願ひみんな、俺は怖い子じゃねーよ…

だから恐ろしいものでも見るような眼で見るの止めてくれよー。(泣)

夕飯を食べてみんな寝てしまった。

でも何故か俺は寝れなかつた。

そりやあ、顔面に当ててすぴーと寝れるわけ無いって。・・・外で星でも見よう。

そして空を見上げた。

「おー綺麗だな。明日は晴れだな。」  
空はとてもきれいだつた。

「ほんときれいだね。」

・・・え?

「誰だ?」

「吹雪士郎だよ。よろしくね、雪女くん。」

「・・・俺は一応女だ。」

「女の子だったんだ。」めんね、男の子に口調とかそつくだから・・・

「別にいい。よく間違えられるから。・・・吹雪君?・士郎君?・どうが良いか?」

「んー、じゃあ士郎で。呼び捨ての方がいいかな。」

「分かった。私も雪女でいい。でも、練習中は「雪」って呼んで。」

「うん。そういうば変なこと聞くけど、雪女はどうして男の格好し

て、サツカーしてるの？」

「亡くしたんだよ……家族全員。大雪で、がけがわからなかつたんだ。俺だけ助かつて……」

兄貴、アキトって言うんだけど、好きだつたんだよ、サツカー。兄貴のかわりに、男の子にはなれないけどサツカーするつて決めたんだ。」

「僕もね、双子の弟が雪崩に巻き込まれて死んだんだ。

敦也つて言うんだけど、その時僕だけがたすかつて家族みんなが亡くなつた……」

ぼくも雪女の気持ち分かるからたまに相談に乗るよ。」

え……

士郎も大切な人を亡くしていたん、だ……

「俺ね、兄貴たちを助けるために、必死で引っ張つたんだ。でもね小学生の体力なんか知ってるだろ……？兄貴は私を助けるため、手を離したんだ……」  
・ そのとき、  
兄貴の時計が鳴つてた。だからもう田舎ましとか聞けないんだよ。  
・ 」

気付けば俺は泣いていた。

こんな風に兄貴のことを深く話したのは初めてだつたから……

「僕も暗い所が駄目なんだ。雪崩の時の恐怖が思い出してしまうからね。」

士郎はにこりとして私を慰めてくれた。

「士郎、子供みてーだぞ」  
「・・・・（黒笑）」

士郎、

笑い方が黒いよ・・・?

怖いです」「ワライです」わいです

「すみませんでした。」

「じゃあ、もう寝ようか。」

「そうだな。」

そう言つて私たちは寝る支度をして、  
眠りに就いた。

続く

女で悪かったな・・・（後書き）

黒土郎好きです・・・

嫌だ、嫌だつ！

スースー

いひきや寝息が響くキャラバンカーの中で私は寝息を立てて寝てい  
た。

כטבְּנָה -

そんな静寂の中機械音が響く。

ドクシ

ーお兄ちゃん！お兄ちゃん！

卷之二十一

ドクン

「やだっ！」の手、絶対に離さない！お兄ちゃん！」

一  
雲女

するつ・・・・・パツ

ドクン

「お兄ちゃん! お兄ちゃん!」

「生れた。どんな」とかあってもお前だけは生れたー。」

「嫌だあ……………」

「いけないつ……早く目覚ましを切つて……」

吹雪がそう叫んだのが聞こえたけど私は意識を手放してしまった。

吹雪 side

「嫌だあ……………」

雪女が叫んだのが聞こえた。

そうだ、雪女は目覚ましが怖いんだ！！

「いけないつ……早く目覚ましを切つて……」

僕がそう言つたら雪女が倒れた。

「どうしたの！？何の騒ぎ！？」

瞳子監督が来た。

「えっと、急に雪女が叫んで……」

キャプテンが監督に話しているけど、自分キャプテンにはわけがわかつていないうづな。

「監督、雪女は田覚ましの音が聞けないんですね。昔の『』を思い出しちゃう、

と言つていました。」

「やべ、じゃあ龍崎さんを寝かせておいて。みんなは朝『』はんよ。

」

そつ言つて監督は何処かへ行つてしまつた。

吹雪 side 終了

「ん・・・・・」

田を覚ましたら秋ちゃんと春奈ちゃんと士郎がいた。

「あ、雪女ちゃん！ よかつた～気がついたのね！ ！」

「大丈夫？ 雪女。」

「うん、ありがとう。みんなはどうしたんだ？」

「練習中だよ。」

「でもびっくりしました。急に叫びながら雪女先輩、倒れちゃつたんですから！ ！」

「あはは・・・『』めんね。」

「でも知らずに田覚ましかけてて、ごめんね。」

「いいんだよ、別に。」

俺はベッドから起き上がつた。

「ど、何処行くんですか！ ？」

「え？ 何処つて練習だけど・・・？」

「今は安静にしてなきや！」

「いいよ、さつき倒れたのは精神的問題なだけだからな。でも心配してくれてありがとう。」

俺はにこりとほほ笑んだ。

「行つてきます。土郎も行つぜ。」

「えー／＼／＼ あ、うんー。」

そう言つてみんなが練習してくるグランデへと駆けて行つた。

(女人の笑顔に惚れる)「こいつ、あるん だ／ですね・・・・／＼／＼

春奈と秋はほとんど同じことを思つていた。

(わ、笑ひと女子なんだ・・・・)

そして土郎も。

続く

技は出しきても駄目になるんだぜ

スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード！

ムゲン ザ ハンド！……

バキッ！

「つてうわつ……」

私はみんなと合流した後、立向居君と練習をしている。

「練習は良いけどよ、昨日みたいになるなよ？そんだけ忠告。」「はい。すみません、もう一回おねがいします。」

「これで何回目だらうか？」

「頑張つてるのはいいけどよ、立向居君もうボロボロだぜ？マジで大丈夫なの？」

あ、珍しいな。

俺が言うのもなんだけど、人のお世話はほとんど焼かない。

「はい、大丈夫です。もつと・・・もつと強くなつてみんなの役に立ちたいんです！」

雪先輩は大丈夫ですか？」

この子、偉いな。俺と大違い……

自分が自分で泣けてくるよ、こんな性格（泣

「俺は大丈夫。ショート打つてるだけだから。」

行くよ、と言つて私はまたボールを蹴った。

午前の特トレーニングが終わり、

お匂いはんを食べて居る時、春奈ちゃんが私に話しかけてきた。

「雪先輩、ドラゴン・アイシクルブリザードって何ですか？ データで見たんですが、

一回も見せてくれたことないですよね？」

ギクッ

「は、春奈ちゃん何故そー」「そつなのかーまだ新しい技があるのか雪ーー俺たちに見せてくれよーー」・・・・・

守はキラキラした目で俺を見て來た。

「守・・・そんなキラキラした目で見られても・・・

「これは一人用の技なんだよ。監督はこの技、知つてますよね？」

そう言つたらみんなが監督の方を見た

「ええ。誰にも止められないといわれている伝説の必殺技、だと私は聞いて居るわ。」

「はい、俺は兄貴と一緒にこの技をしていましたが、この技は誰にも止められることがありません。

それに止めさせる気はありません。」

「すごいな、雪！！！ ますますその技が見たくなつたぞーー！」

「大した意氣込みね。 私も円堂くんの意見と同じよ。 それじゃあその技を打てるパートナーを決めて、 その技を今度の試合の時までに完成させなさい。」

・・・・・はい？

え？

「今、何と・・・・？」

「パートナーを決めて確実に今度の試合までに戦力にしなさいーー！！以上よ。

お昼を食べた人から各自トレーニングをして。」

そういうと監督は何処かへ行つてしまつた。

アレは兄貴と一緒に開発した技で、兄貴はこう言つてた。

「この技は、俺とお前だけの技だ。 盗ませないし、盗ませぬ気も無い。」

そう思つて私は重いきり頃垂れた。

監督、貴女は鬼ですか、魔物ですか、悪魔ですか（（泣

ほんとにどうしようつかな・・・・・

その話の後に食べたい飯は味がしなかつた。

兄貴、なぜかあの言葉聽到だよな？

「はー、ビリミー・・・・・」

俺はずつとその言葉を繰り返していた。  
だって、兄貴の言つことだぜ！？マジに決まってるだろ！？

「なら、全員と試せばいいんじやないか？」

「ん？ 守・・・・・・・・

「有り難う！…その手があつたぜ！…！」

あまりにうれしくて、思わず守に飛びついでしまった。

「お、おわつ／＼／＼それじゃあまず俺ともつてみるか？」

「ああ、あの技はぞ、結構難しいんだよな。」

龍だけのなら一人で出来るからさ、俺の見てて。あ、立向居君ボーラルかして！」

立向居君からボールを借りた後、ドラゴン・アイシクルブリザードの体制になつた。

「たあつ！…！」

俺は叫んで、ゴールに集中すると、ボールを思いつきり蹴った。

「アーヴィング・アイシクルブリザードvsル・ダーリングハシングル……」

「ボールにドーラゴンが巻きついたと思うと、

そのままボールは地面に急降下し大きな穴を開けた。

「あ、やべえ。兄貴が死んでからやつてないからやつぱりコントロール出来なかつた……」

あれ、みんなの反応がない……？

「お前すげーな！！」

「これ、誰も止められない意味がわかつたよ。」

「一人だけでこれだけの威力とは……思つていていた以上だ。」

反応が遅かつただけか

ほんとひやひやさせられるな、このチーム……

「はー、じゃあ守やるわ。」

「おうーー行くぞーー！」

そう言って私たちはボールを蹴つたけど、  
私と守とでは出来なかつた。

そう言つたのは土郎。

「うーん……俺じゃないのか……。次誰がやるんだ?」「じゃ、僕がやつてみるよ。」

「ん、分かった。」

「この技僕らで出来るといいね。」

「んー・・・そう願うぜ。」

「／＼／＼うん。」

「」

あれ？

士郎の顔が赤い・・・・?

俺、早く相手を見つけてこの技完成させたいんだけど。

「行くよ、士郎。」

「うん。」

「「たああああああっ！！」

俺たちはボールを蹴った。

続く

兄貴、やつはあの言葉嘘だよな？（後輩も）

関係ないけどアイス食べたい

・・・嘘だら~。(前書き)

雪女ひさん途中から『』になつます。

・・・嘘だろ？

デリラゴン・アイシクルブリザード――――――

そう言つてボールを蹴つたら俺からデリラゴンが、  
士郎からは吹雪が出てきた。

そして吹雪とデラゴンは、天を駆けて  
ゴールにボールが突き刺さつた。

そしてゴールのネットを引き裂いた。

「で・・・できた・・・出来たぜ！士郎！」

「出来た！――僕ができるなんて・・・びっくりした！――

俺たちが歓喜に浸つているとみんながこいつに喜んでいる顔と青い  
顔をしてきた。

「すいにな――お前ら―― これだったらハイア学園なんて簡単  
に倒せちまつな――」

「でもどーすんだ？ ボール破けたぞ・・・」

「あ・・・・・」

「や、やばい

絶対夏末におく「あ～な～た～た～ち～――」  
・・・・・・・・・やば

「「「」、「」、「」」

「待ちなさいーーー！」

そう言つて俺と土郎は走つて夏末から逃げた。

そのあと散々夏末に追いかけられた。

鬼のような形相をして追いかけてくる夏末には恐怖しかわかなかった

た

いや、人間つて此処まで怖くなれるもんなんだね。

『はあー疲れた。』

やつとお咎めが終わつた。  
さて、ご飯でも食べようか

♪♪♪♪♪ いただきまーす！！・＼＼＼＼＼

今夜は俺の大好きなハンバーグだーーー

おいしそう

パクッ

・・・・・

『春奈ひやん。』

「はい？ってどうしたんですかーーー？」

そんな涙目でーーー？」

『かひやくてひにほう（泣たしけふえーー）（泣）』  
にそう（泣助けてーー）（泣く）』

今なら口から火が吹けそう・・・

「ウツシッシ〜 素直に食べてやがんの〜（笑）

「小暮君！何回悪戯したら気が済むのーー」こり、待ちなさいーー！」

『ほひゅれ！おひやえのひひやひやだつひやのか！』訳：小暮！お前の仕業だつたのか！』

そう言つて小暮君を追いかける春奈ちゃん。

つてか、助けて春奈ちゃん！！

俺、死にそなんだけど（泣

みんな笑つてるし！！なんですか、放置！？

放置の割にはお口の中が大火災なんだけど！？

ひりひりするーーー（泣

「大丈夫ですか！？雪女先輩！これよかつたら飲んでください。」

そう言つて水をくれたのは立向居君

何君？天使？

嗚呼、やっぱ君は良い子だね！？

『あふいがひようーー』訳：有難うーー

それから水を飲んで元気になつた俺はこつてり小暮君を懲らしめたあと、士郎に呼ばれた。

「ちよつと良いかな？」

『え、うん。良いけど?』

何かあるのかな・・・?

『ハ、告白・・・?』

士郎はキャラバンのところで止まってくれた。

『なあ、何があった・・・』

そういうかけた途端、士郎が抱きついてきた。

『――?ちよ、士郎!――?/?/――?/――?』

俺は急なことに驚き、赤面した。

「今日、僕しつかり気付いたんだ。雪女、君の事が好きだよ・・・」

。

え・・・・・/・/・/

まさか、まさかこれって、告白!?

。

『え/・/・ そ、な急に言われても・・・・・

「だから返事は今度聞いていい?」

もうすでに私の頭はオーバーヒートしていた。

じゃあね、と言つて士郎は何処かに行つたけど、

俺はしばらく体が動かなかつた。というか俺、男女だけどさーえ?コレなんかのドッキリだつたら嫌だよ?

必殺技の相手が見つかつた。それは嬉しいことなんだけど  
そんな、告白つて・・・俺の気持ち、どうなんだろう?  
そして新たな試合場所が決まった。

え・・・?

搖理籠学園ー? うそでしょ! ?俺の(元)学校が、次の標的・・・

あいつら・・・絶対悪さしてるうううううー!

(特にマル口とアル口ー)

続く

## 恋心・・・かあ

あれから私は当てもなくそいぢり辻をぶらぶらしていた。

「今日、僕しつかり気付いたんだ。 雪女、君の事が好きだよ・・・・・・」

「あんな」と言われても、俺には分からない・・・・・・  
どうすればいい?こんな男女な俺でいいのか?  
心のもやもやが増えていく。

心と表情が連鎖的に纏つっていくのが自分でもわかる・・・・・・

『ハア・・・・・・』

自分でびっくりするくらい大きなため息が出た。

「どうしたんだ雪女? 何か嫌なことでもあったか?」

あ・・・・・ 緋海さん

『ちょっとといふこりあつてな・・・・・・』

俺は緋海さんならぶん大丈夫だと思って、さつきあつたことを全て話した。

「ふ～ん・・・・・ で、雪女は吹雪の事如何思つんだ?」

『優しいけど、黒いって思つ。』

「・・・・・ そりが、じじゃあ他のメンバーはどう思つ?・・・・・

『え？ じゃあまづ巴堂君はす』  
園寺君はサッカー田茶苦茶強いし

・・・・・ 小暮君は悪戯ばっかしてる。 最後に立

向居君は何、天使？って思つた。』

「え？俺は？」

『一緒に話してたから忘れてた。』

「・・・何気にお前Sだな、おい」

そいつ言つて笑いだした綱海さん。俺もつられて笑いだしてしまつた。

「よし！..んじゅ戻るか！..！」

『あいあこせー！..』

何かが吹つ切れたような気がした。

綱海さんとキヤラバンに戻ると、みんなが集まつていた。

「んー？どうしたんだ、みんな集まつて・・・  
「次の勝負場所が決まつたんだ！..」

とグツと拳を見せてくる守。

『何処なの？』

「はい・..・..それが・..・..」

『それが・..・？』

春奈ちゃんが言つのをためらつてゐる・・・？

「推理籠学園、なんです。」

へ？

What?

『ナニイツテルカ、ワカンネーンダケド？』

「火月が壊れた――！？」「――」

うん、なんかもう吹つ切れた！！

「しかもそれが2日後なんです・・・。」

『期限短いね・・・』といふか、獣谷にみんな来るの？』

「はい、そうですよ？』

・・・・・・

『電話借りるぜ？』

もう嫌だ。

みんな‘へ？’って顔してて。

うん、だって

『あいつら何してるか分かんないもん。特にマルコとアルコが！』

そう、搖理籠は結構不良がじろついてるのだ

たとえば、リボーンのヴァリアーのように！たとえば、ミルフィオーレ基地のように！

うん、俺が納めてたから良かつたものの今俺が居なくて何やつてるか分かんない・・・

シオンが居るだろうが、アルコとマルコは小暮並にたちが悪いから

な。

双子なだけに、息もぴつたりだからなあ・・・・・・・・

『「ということで電話借りるぜ。』

クロウに電話をかけた。

プルルル　プルルル

ク「はい。」

雪『おいクロウ。』

ク「え、雪さんですかー？　・・・・・いや大丈夫ですよーー！」

ア・マ「他校と喧嘩なんてしてませんからーーー！」

雪『その反応、絶対に喧嘩してんだろー？　2日後にイナズマイレブンが揺理籠に行くから、さつさと蹴りつけろーーー！』

ク「えーだって雪ちゃんが居なくなつていのんな学校から喧嘩売ら  
れてますーーー！」

ア「2日や3日で片付けられませーん。だよな、マルコー！」

マ「だよな、アルコー！」

雪『宇宙人に学校壊されつぞ、オイ。　というか喧嘩売つてきた学  
校に私が今度たっぷり遊んでやると言つとけ。』

ク「はーい。分かりましたよー。　その時私たちも連れてつて下さ  
いねー。』

雪『ん。じゃあしつかりお迎えしろよ。』

「「「了解でーす。」」

ブチ

はあ、油断も隙もない・・・・

「如何だつたんだ？龍崎。所々怒つてたが・・・」

と鬼道さんが聞いてきた。

『いや～はい、思つた通り喧嘩してたぜ。でも大丈夫だ、ちゃんと喧嘩収めたからな！！』

・・・・あれ？皆何で引いてるんだ？何もおかしくないじゃねーか。』

（（（（一一番お前がおかしいわ！-））））

みんなの意見がまとまつた瞬間だった。

「つねに、私たって女に戻るとおぐりにある

『はあ～ついた！！』

ただ今俺たちは搖理籠学園についた。

・・・はずだよな？

ん？何で他校の奴らが居る訳？

『クロウちゃん？シオンちゃん？ビリコリとかな？これは。（黒笑）』

「ひ、ひいい！～雪さん！？　あ、いえ、えつとこれは・・・」

言い訳は聞きたくないぜ

「（言い訳は聞きたくないって顔してるう！～）シオン、バトンタツチですー！～」

「え！？俺かよ！？えつとこれは他校の乗り込みで俺らはなんも悪くないんだよ！～？」

だから怒りのオーラ引っ込めて

『ふーん。』

俺は他校の奴らに歩み寄った。

「なんだお前？　俺らに『出でていけ。』お前俺らに喧嘩売つてんのか！？　てかお前誰だ？！」

『火月雪女。』

ギャー――――――――

『負け犬めが。俺に喧嘩売つといて何逃げてんだよ。』

「（名前だけで追い返した！？）  
「雪さん、みんな引いてますよー？」

あ、みんなの事忘れてた。

『今のはうよな

「忘れられるか——！」

みんな突っ込み厳しいね（汗）

「あ、みんな氣にせかし練習しちゃうよ。」

「帝いりやんす・・・

『壁山君、栗松君、気にしないでつて言つたよね？ さ、練習しよ

卷之三

そんなに怖がられたら悲しいんだけど・・・

「はいっ！」

今現在俺たちはエイリア学園との試合に向けて特訓をしている。  
そんなみんなにも規則らしきものができた。

『...』

サツ

そう、俺たちが「ゴールを決める時、みんなが道を開けるよ」になつ

た。

「てか避けないと危険だろ・・・」

みんなが言うからそういうしい。まあ、威力はハンパないと思つよ俺も。

今では力抑えられるけど、前ゴールやぶつちやつたからなー（遠い目

これがあればエイリアなんて簡単だ。絶対俺たちの搖理籠は守つて見せる!!  
それに・・・

『もう何も失いたくないんだ・・・・・つ・!・!』

兄貴のためにがんばるから。

そして夜になつた。

お風呂に入つて夕飯も食べたし、

明日はいよいよ試合だな・・・ふと空を見上げた。

空には星たちが自分を忘れないで、といつよつに煌めいていた。

『あ、流れ星だ。きれいだなあ。』

久しぶりに女の子に戻れだし、流れ星と言つたらお願ひ事しなきや。

『お願ひ・・・どうかどうかみんなと一緒に勝てますように・・・  
如何したんだ?暗い顔してそれに、女に戻つたな。火月にしては  
こんなこと珍しいな。』

『き、鬼道!?何時の間に居たの!?存在感ないわよつー?』

「いつもと変わらなかつたな。さつきまでの大入しさは何処へ行つた?」

そう言われた時に自分でもわからないほど不安に襲われて涙がこぼれた。

「おい、大丈夫か！？そんなに深刻だったのか！？？」

私は作り笑いをした。

『ううん。大丈夫。だから気にしないで。』  
「でもお前隠してるつもりなんだろうが、顔にすじくつらじつて書いてあるぞ。」

え・・・・

『う、うそだ～！！ 私は平気だ』「なら何故泣いている。」そ、  
それは・・・・』

私には分からぬ。

『自分が何故悲しいのかが分からなくて、それが矛盾していくのが怖い・・・・』

「なら、みんなで一緒に矛盾がどうして生まれてくるのか考えればいいんじゃないかな？」

『鬼道・・・・有難う。そうだよね。』

「ああ、お前には笑顔が似合つ。』

『ん、分かった／＼／＼』

ありがとう・・・・

それから星空を眺めながら思った。

こんなに人を愛おしいと思つたのは久しぶりだ。

守、鬼道、士郎、立向君、綱海さん、秋、塔子ちゃん、春奈ちゃん・・・

それみんなに会えたことに感謝しないといけないって。

みんな優しくてキラキラ輝いて生き生きとしている。

ひとりひとりの個性があるのにその個性をつぶさない・・・

お互いが大切だから。

そんな仲間に出会えたことが奇跡なんだ。

わざわざまでの不安が一気に何処かへ行つた。

みんなが居るから・・・

それだけで心が強くなつた。

(ありがとうございます。) (みんなが居たから此処に居られるんだ。)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5491/>

---

ブリザードとスノーガール。

2010年10月9日07時43分発行